様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １６ 日現在

機関番号：６４３０２
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2010～2014
課題番号：２２５２０１７９

研究課題名（和文）〈古典〉徒然草研究の再構築と定位

研究課題名（英文）Reconstructing and Evaluating the Study of Tsurezuregusa and its Canonization

研究代表者
荒木　浩（ARAKI, Hiroshi）

国際日本文化研究センター・研究部・教授

研究者番号：６０１９３０７５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、『徒然草』という中世文学作品の古典化をめぐる諸相について、文献学、時代相、注釈的観点、近代的理解の把握、国際的日本文学研究の視点という五つの観点から多角的な分析を行い、併せて関連作品の『方丈記』や『枕草子』についての研究も推進した。成果公表として、国内外の研究集会や国際学会での口頭発表・講演等を行い、学術誌で論文化するとともに、公開講演会や新聞、ラジオ出演等を通じて、一般社会への研究成果還元も試みた。研究の総体は編著『中世の随筆』に集約した。最新英語論文の翻訳・紹介にも取り組み、同上書に収録した。

研究成果の概要（英文）：The aim of my project is to reconstruct and evaluate the study of medieval literal classics Tsurezuregusa and its canonization. This research was accomplished from five angles of view, such as bibliographic research, focusing the era of Tsureduregusa, hermeneutic reading and its history, modernization of classics and analyzing texts in the context of international Japanese studies. In the process, I also researched the similar genre masterpieces: for example, Hojoki and Makuranososhi. I made many presentations on this project at workshops and international conferences in Japan and abroad, and published several articles in academic journals. Moreover, in the public lecture, newspaper, and radio program etc., I tried announcing my fruits to the public. Finally, the almost of whole results on this project were collected and published in the book ‘Chusei no Zuihitsu’ edited by me. And I made translation of the up-to-date foreign scholar’s English article, which is included in that book.

研究分野：日本文学

キーワード：徒然草　随筆　古典化　国際的日本文学研究　方丈記　枕草子

１．研究開始当初の背景

従来『徒然草』という作品は、中世における代表的古典作品として扱われてきた。特に昭和時代、小林秀雄『無常という事』の出現によって、西洋の『随想録』にも伍すべきすぐれた古典性と精神性を有する作品として位置づけられることになり、その古典性は揺るぎないものとなっていった。一方、日本文学研究の学界においては、昭和 40 年代に『徒然草』研究の一つのピークがあり、三谷栄一・峯村文人『徒然草解釈大成』（1966）、安良岡康作氏による『徒然草全注釈』全二冊（1967-8）がそれぞれ刊行された。また『諸説一覧徒然草』（1970）など、研究史の総括的整理が行われ、以後、昭和 50 年代初頭までかけて、別冊の『徒然草事典』（1977）を含めると全五冊に及ぶ『徒然草講座』（1974）の刊行が行われて、今日的研究史の基礎が確立した。300 回を越える連載的注釈である久保田淳氏の「徒然草評釈」も 1978 年にスタートしている。ほぼこの時期に『徒然草』は、現在に至る研究史的位置付けと文献学的環境を確立したのである。

しかしちょうどその時期、日本文化に於ける中世観の根幹を揺るがす研究が多く報告された。伊藤正義「中世日本紀の輪郭」（1972）などを端緒とする、中世の学問・注釈、仏教、神道などをめぐる、文献研究の画期的飛躍がそれである。新資料の発掘や、寺院経蔵の調査などが広く展開され、特に 1980 年代以降、多くの文学研究者が、中世言説と資料研究について多くの精緻な業績を発表していくことになり、日本の中世文化観は、文学研究の場においても、大きなパラダイムチェンジを経験した。それは『徒然草』著者の兼好が立脚する時代と文学の解明にも深く切り結ぶ。歴史学においても、中世政治と王権の問題、寺院と権力、荘園を中心とする政治経済史的視点、記録文献の再読、東アジア的コンテクストによる研究など、中世研究のコンテクストは飛躍的に変貌したが、その基盤の一つにも、共同研究的になされる寺院の文献学的研究がある。こうした研究状況はいずれも『徒然草』生成の時代に直結するものであり、従前の文化・歴史観では、『徒然草』に対する十全の理解はもはや難しい。

ところが『徒然草』の通俗的理解と関連本の出版は依然盛行を極め、如上の状況は必ずしも浸透していない。先端的中世研究と、従来の『徒然草』読解と、さらに通俗的『徒然草』観との間には、それぞれ深刻な齟齬がある。高等教育の教科書や参考書、あるいは大学の演習の場などでも、最新の研究コンテクストをもとに『徒然草』の本質を正確に伝えることには相応の困難が伴う。たとえばもっとも基礎的な立脚点である本文についても、通行〈古典〉本文として烏丸本の『徒然草』像があまりに牢固であるため、最古本としての正徹本を初めとする多くのテクストによる本文批評を行って『徒然草』本文を再構築して提示し、共有し、さらにその本文に立脚した新しい解釈を示して一般に定着させることさえ、実は簡単ではない。ステレオタイプな『徒然草』観や中世観に対する相当多面的なパラダイムシフトとその提示が必要である。

上記諸点に鑑み、本研究を構想し、『徒然草』という〈古典〉に関して、総合的に今日的再構築が必須であると思量し、本申請研究を構想した。

２．研究の目的

(1) 本研究においては、中世文学研究の現在的状況と『徒然草』の今日的研究とを統合的・インタラクティブに交流させて研究の進展につとめ、『徒然草』の〈古典〉的位置づけを再構築し、現代的・国際的な視界のもとに定位することを試みる。そのための研究環境の整備と文献学的諸考察も本課題研究の重要な課題である。そこで本研究では、近年刊行されたすぐれた現在的達成である稲田利徳『徒然草論』（2008）他の業績を発展的に継承して、『徒然草』という古典作品や随筆文学とジャンル分けされる作品をめぐって総合的に考察を進める。

(2) 上記の遂行に際して、本課題における研究の大きな軸と目的を以下の 5 点に集約して定めた。

①文献学的調査（高乗勲文庫や金沢文庫他の新資料群の調査と位置づけを含む）、
②時代と作者の関わりに関する調査（伝記事項及びジャンル論の再検証を含む）、
③『徒然草』に対する注釈的調査、
④『徒然草』の近代的理解の把握（近代的ジャンル論の再検証を含む）、
⑤国際的日本文学研究というコンテクストにおける研究交流とアウトカム、
以上である。

３．研究の方法

本研究に於いては、計画段階から、全体を通じておおむね、以下の(1)～(10)までの諸点において研究を推進した。カッコ内に「研究の目的」で示した箇条書きとの対応を示す。

(1)『徒然草』の文献学的研究を進め、『徒然草』関係書の集書で名高い高乗勲文庫本（国文学研究資料館に収蔵された）など、近年の新出資料を含めて再調査し、従前の研究を改めて検証する。『徒然草』の本文についても焦点を当て、古典の定本とは何かという根本的な問題を文献学的に確かめながら、『徒然草』観の再構築の一歩としたい。（①に相当）

(2)『徒然草』という作品の解釈と定位をめぐる立脚点を再考するため、江戸時代以来、現行にいたる代表的注釈書の調査、また関係新資料の発掘を行う。活字化された資料はもちろん、未翻刻の資料についても、各地の文庫等をたずね、実地の原本調査のほか、写真を使っての調査を進め、『徒然草』理解をめぐる考察を進める。（①と③）

(3)上記作業の基盤として、『徒然草』研究と関係書の集書で名高い高乗勲の旧蔵書（高乗勲文庫）について、落合博志の研究蓄積（『田安徳川家蔵書と高乗勲文庫』2003 所収講演録及び目録等）を踏まえ、落合とも研究協力して、『徒然草』関係書の調査・分析を行う。（①と③）
(4)現行の代表的注釈書の分析を行い、現代の『徒然草』観の依って立つところを確認する。（③と④）
(5)現代の文学・歴史・仏教学など関連諸学の研究を踏まえ、荒木旧稿を展開して、『徒然草』の立脚する時代観や文学観、また中国（仏教や宋学）との関係を再考する。（②と③）
(6)(5)と深く関わるが、作者兼好についての伝記研究とその歌人として達成について、稲田利徳（『和歌四天王の研究』他）の研究を軸に、研究史的整理を行う。（②と④）
(7)『徒然草』の出典論を再考する。引用文献の整理とともに、『源氏物語』や『枕草子』など、出典関係が確認されているものについても、その引用論について分析する。（①と②と③）
(8)『徒然草』のジャンル論として文学史上の「随筆」概念を追求するとともに、関連作品の『方丈記』や『枕草子』についての分析を進め、『徒然草』とは何だったかを考察する。（②と④）
(9)朝木敏子氏の研究（「徒然草の近代―文学史記述をめぐって―」2007）他の先行研究を軸に、近代における『徒然草』観を概観する。（⑤に相当）
(10) 荒木がこれまで蓄積した、海外での教育・研究のバックグラウンドを踏まえ、昨今の国際的日本文学研究のコンテクストに即して、海外での研究を参照し、また国際集会に参加して発表を行うとともに、研究交流を推進する。（⑤相当）

４．研究成果
(1)以下、まず「研究の方法」にそって以下に成果を記述したうえで、(2)において総合的な成果報告を行う。
①『徒然草』文献学的調査については、国文学研究資料館の高乗文庫をはじめ、京都大学付属図書館、国立国会図書館、今治河野美術館、金沢市立玉川図書館などに所蔵される『徒然草』関連資料を調査した。特に高乗文庫については、浄教本他の重要伝本についての本文調査を進めた。同書については、現在、基礎領域研究という日文研のプロジェクトで読解を続けている。なお(2)で詳述する『中世の随筆』という編著に所収した落合博志稿は、諸本を博捜して新しい伝本論を打ち立てようとする新しい試論である。
②『徒然草』注釈書の検討について、上記の文献調査と併行して行い、『中世の随筆』所収論文で個別の問題に絞って、分析を進めた。先駆的研究者小松操について業績を収集してその検証を進め、研究推進に資した。
③2010 年から、当時、目録等整理途上であった国文学研究資料館の高乗文庫本の調査に着手した。その後国文学研究資料館では、2011 年度に整理が進み、一部デジタル化も進められ、目録情報の検索も可能になったため、当初の計画を変更し、既述の通り、浄教本他の重要伝本等にしぼって、調査を進めた。
④現行の代表的注釈書の分析と現代の『徒然草』観の依って立つところについては、『アジア遊学』所掲論文と『中世の随筆』所掲論文及びあとがきなどで分析を進めた。
⑤国際高等研究所での口頭発表「『徒然草』と法語」、『アジア遊学』所載の論文「『仏法大明録』と『真心要決』―『沙石集』『徒然草』の禅宗的環境をめぐって」において、『徒然草』の時代と作者の関わりについて、禅宗や宋学の視点からの考察を進め、『徒然草』の立脚する時代観や文学観を再考した。また『徒然草』と謝霊運の関係とも関わる源隆国『安養集』の問題を軸に、中国人民大学の国際学会で発表し、研究交流と情報交換を行った。同発表は一部活字化した。
⑥作者兼好の伝記研究については、荒木個人の研究を進めるとともに、近時最先端の兼好法師伝研究を発表した小川剛生や、歴史研究者の松薗斉らの研究協力を仰ぎ、現在の研究水準としてはもっとも新しい研究成果を『中世の随筆』に収録した。
⑦『徒然草』の出典についても、『中世の随筆』所収論文において、私見を発表した。
⑧ジャンル論については、『中世の随筆』の「序」、荒木論文、及び「あとがき」に関連の研究成果を概観・分析するとともに、中野貴文の関連研究を同書に収録した。『徒然草』古典化に相即する重要な関連文献である『方丈記』の考察も進め、その一端を人間文化研究機構のシンポジウムなどの講演を通じて発表し、「『方丈記』の文体と思想」などに論文化した。また関連する問題を新聞のコメントとして発表し（『朝日新聞』大阪本社夕刊、「流れは絶えず 方丈記 800 年」３、2012 年 1月 6 日）、国文学研究資料館での特別展示「鴨長明とその時代 方丈記８００年記念」の開催と図録作成に執筆者として協力した。
⑨近世・近代における『徒然草』観については、『中世の随筆』所収稿で個別の研究を進めた。
⑩国際的日本文学研究のコンテクストでは、2010 年 10 月、タイ・バンコクで開催された「日本国際研究シンポジウム 2010」や、2011 年 8 月、タリンで開催された第 13 回 EAJS 国際会議に参加し、本研究課題に密接に関係する国際的研究についての情報を収集し、また各国の研究者と研究交流を行った。また NHK「ラジオ深夜便」明日へのことば「世界に誇る日本の古典を見直す」（2012 年 10 月 25 日）に出演し、『方丈記』をはじめとする古典文学作品の内実と今日的意味を説明した。2014 年 9 月、中国人民大学で招待講演を行い、「中

世の随筆」概念について発表した。

(2)本科研の総括的研究として、ほぼ 4 年をかけて『中世の随筆―成立・展開と文体―』の編集を行った。本研究の総体を示す意味もあり、以下に目次を示す。数字は開始ページ。

序　（荒木 浩）…1
Ⅰ 随筆とは何か
・「随筆」とは何か―概念編制史からのアプローチ―（鈴木 貞美）…11
・〈肆筆〉の文学―陸亀蒙の散文をめぐって―（高橋 文治）…33
Ⅱ 中世随筆の前史と和文
・藤原定家の『枕草子』（渡邉 裕美子）…57
・日記というジャンルと『たまきはる』（丹下 暖子）…81
・『無名草子』の宮廷女性評論（田渕 句美子）…99
・説話集と随筆―『発心集』の場合―（伊東 玉美）…120
Ⅲ 方丈記の世界と時代
・『方丈記』論―作品成立の場と享受圏をめぐって―（木下 華子）…141
・中国文学と『方丈記』―表現・思想・文体の視点から―（陸 晩霞）…166
・方丈記の装丁とジャンル意識―前田育徳会尊経閣文庫蔵『方丈記』をめぐって―（海野 圭介）…189
・『方丈記』は片仮名文で書かれたかを考える―さまざまな変体漢文の訓読文から―（三角 洋一）…207
・読者としての長明―保胤の記述に「自己」を見出すこと―（アラリ・アリク／荒木 浩 編訳）…230
Ⅳ 徒然草の世界と時代
・『方丈記』と『徒然草』―〈わたし〉と〈心〉の中世散文史―（荒木 浩）…261
・徒然草と金沢北条氏（小川 剛生）…　293
漢文日記と随筆―『徒然草』と「日記」の世界―（松薗 斉）…315
・『徒然草』のジャンル論（中野 貴文）…338
・『徒然草』本文再考―第十二・五十四・九十二・百八・百四十三段について―（落合 博志）…358
・徒然草と中国思想（曹 景惠）…379
Ⅴ 中世随筆の環境と周縁
・「禅宗仮名法語」覚書―道元・一休に擬せられる仮名法語を中心にして―（飯塚 大展）…401
・仮名法語の享受と文芸―大阪市立美術館蔵『はいかひ』絵巻をめぐって―（恋田 知子）…435
・真言僧の雑談と口決（髙橋 秀城）…　456
・中世後期の類書と随筆―『壒嚢鈔』を中心に―（小助川 元太）…475
Ⅵ 中世随筆の近世と絵画
・鴨長明の儒風―方丈記受容史覚書―（川平 敏文）…599
・記号から物語へ―『なぐさみ草』の挿絵―（朝木 敏子）…517
・中世随筆・日記文学の奈良絵本・絵巻（石川 透）…543
・あとがき（荒木 浩）…556
・用語索引…582
・執筆者一覧

上記のように 20 人以上の論文執筆メンバーを集め、『枕草子』『方丈記』『徒然草』を軸に、随筆の概念、中国の随筆論をはじめとして、中世から近代までの論を集めた。文学のみならず、仏教・歴史・美術・中国文化等にも視野を広げ、また国際的な視点からの分析を取り入れて、中国、台湾、エストニアの研究者の論文も採択している。荒木は「序」と「おわりに」で随筆概念と文学史を論じ、本書総体を概観して研究史的位置づけを行っている。荒木の論文では『方丈記』『徒然草』から夏目漱石までを俎上に挙げ、随筆作品の持つ意味について、精緻にかつ幅広く論じている。アラリ・アリク稿については、海外の最先端の研究者の英語論文を日本語で提供するという目途もあり、翻訳も担当した。

(3)本研究成果の対象である中世古典と随筆文学の研究については、たとえば『朝日新聞』読書欄で「ニュースの本棚 方丈記 800 年」の執筆を依頼され（2012 年 8 月 5 日）『方丈記』研究の紹介を行ったが、そのことは、本研究の評価の一端を示すものである。

(4)編著『中世の随筆』については、今日の日本古典文学研究が細分化し、また「文学性」を正面切って問うことがいちじるしく減少している中、正面切って『枕草子』『方丈記』『徒然草』という所謂三大随筆を取り上げて「随筆」の文学史を問うたこと、またその分析に比較文学的視点と学際的・国際的方法を合わせ用いたことなど、重厚な研究書として評価されているとともに、近刊の角川ソフィア文庫『徒然草』をはじめ、各所収論文はすでに陸続と研究論文等に引用されている。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　８件）

① 荒木 浩、【書評】稲田利徳著『徒然草』論、レポート笠間、査読無、No.51、2010、92―98
② 荒木 浩、モノの極北―ツクモ・心・コトバ、アジア遊学、査読無（招待）、132、2010、56―59
③ 荒木 浩、『仏法大明録』と『真心要決』―『沙石集』『徒然草』の禅宗的環境をめぐって、アジア遊学、査読無（招待）、142、2011、74―89
④ 荒木 浩、The Time-Space Continuum of Commentaries: From the Perspective of Medieval Literature and the Study of

Narrative Tales、TRANSACTIONS OF THE INTERNATIONA CONFERENCE OF EASTERN STUDIES 、 THE TOHO GAKKAI(THE INSTITUTE OF EASTERN CULTURE)、査読有、No.LVI、2011、 131―133

⑤ 荒木 浩、『方丈記』の文体と思想―その結構をめぐって―、文学 隔月刊《特集》方丈記 800 年、査読無（招待）、第 13 巻・２号、３，４月号、2012、61―76

⑥ 荒木 浩、読めないテクスト「和語」で書くこと、日語学習与研究、中国日語教学研究会会刊、査読有、2012、14―21

⑦ 荒木 浩、『方丈記』と『徒然草』―〈わたし〉と〈心〉の中世散文史―、中世の随筆―成立・展開と文体―、査読無、2014、262―292

⑧ 荒木 浩、『方丈記』再読、京都学問所紀要、査読無（招待）、創刊号、2014、174―221

〔学会発表〕（計　７件）

① 荒木 浩、『徒然草』『沙石集』をめぐる禅宗的環境、国際高等研究所研究プロジェクト「宗教が文化と社会に及ぼす生命力ついての研究－禅をケースタディとして」2010 年度第 2 回研究会回研究会、2010 年 12 月 17 日、国際高等研究所（京都府）

② 荒木 浩、注釈の時空―中世文学と説話研究の視点から、第 56 回国際東方学者会議東京会議（SYMPOSIUM V「注釈の未来―日本文学研究から」）、2011 年 5 月 20 日、日本教育会館（東京都）

③ 荒木 浩、方丈記の結構と禅的解釈をめぐって、国際高等研究所研究プロジェクト「宗教が文化と社会に及ぼす生命力ついての研究－禅をケースタディとして」2011 年度第 2 回研究会回研究会、2011 年 12 月 16 日、国際高等研究所(京都府)

④ 荒木 浩、読めないテクスト「和語」の矜持―源隆国の『安養集』遣宋と「宇治大納言物語」をめぐって、中国人民大学「日本文学における中国的題材の研究」基調講演、2012 年 2 月 25 日、中国人民大学外国語学院（北京市）

⑤ 荒木 浩、姿・身・心―方丈記の自伝性と外部世界、人間文化研究機構　第１８回公開講演会シンポジウム「不安の時代をどう生きるか 鴨長明と『方丈記』の世界」、2012 年 5 月 19 日、イイノホール（東京都）

⑥ 荒木 浩、『徒然草』と法語、国際高等研究所研究プロジェクト「宗教が文化と社会に及ぼす生命力ついての研究－禅をケースタディとして」2013 年度第二回研究会、2013 年 2 月 16 日、国際高等研究所（京都府）

⑦ 荒木 浩、日本中世の随筆の世界、中国人民大学外国語学院学術報告会、2014 年 9 月 24 日、中国人民大学外国語学院（北京市）

〔図書〕（計　１件）

荒木　浩編、竹林舎、中世の随筆―成立・展開と文体―、2014、582

６．研究組織

(1)研究代表者

荒木　浩　（ARAKI, Hiroshi）

国際日本文化研究センター・研究部・教授

研究者番号：60193075